



Title	偽りの記憶と諸尺度 : 被暗示性尺度 (GSS, CIS) と解離体験尺度 (DES)
Author(s)	仲, 真紀子; Naka, Makiko
Citation	千葉大学教育学部研究紀要. I, 教育科学編, 46, 1-18
Issue Date	1998-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44735
Type	journal article
File Information	CKKK46_1-18.pdf



偽りの記憶と諸尺度

—被暗示性尺度 (GSS, CIS) と解離体験尺度 (DES)—

False memories and some scales: GSS, CIS, and DES

仲 真紀子

Makiko NAKA

記憶が変容し、再構成されるものであることは古くから指摘されている (Bartlett, 1932; Loftus, 1982; Neisser, 1988; Spiro, 1980)。だがこのような指摘は実際にあった出来事が幾分なりとも記録され、保持されていることを前提としている。これに対し近年では、実際に体験しなかったことまでもが「記憶」として植えつけられ、「想起」され得ることが問題とされるようになった (Ceci, 1995; Ceci, Leichtman & Gordon, 1995; Loftus, 1997; Loftus, Coan & Pickrell, 1996; Loftus, Feldman & Dashiell, 1995; Loftus, 1994; 高橋, 1997)。例えばCeciらは幼児に、幼稚園を訪問したサム・ストーンという人物について、実際にはなかったことの「記憶」を植えつけている。彼らはサムの訪問に先がけ、幼児にバイアスのかかった情報を与え、またサム訪問後、繰り返しバイアスのかかった質問を行うことで、サムが本を破いたり、熊のぬいぐるみを汚したりしたという偽りの「記憶」を作り出した (Ceci, 1995; Ceci, Leichtman & Gordon, 1995)。またLoftusらは児童から老人までを対象に、ショッピング街で迷子になったという「記憶」を (Loftus, 1997; Loftus, Coan & Pickrell, 1997; Loftus & Ketcham, 1994), Hyman, Husband & Billings (1995) は学生を対象に、ウェディング・パーティでパンチ・ボウルをひっくり返したという「記憶」を、またSpanosらは学生を対象に、乳児の頃、ベビーベッドの上にモビールがかかっていたという「記憶」を作り出している (Loftus, 1997の引用による)。

このような記憶の形成には (1) 何かを思い出すよう圧力をかけること, (2) その (実際にはなかった) 「出来事」について繰り返しイメージを喚起するよう求めること, (3) そのイメージが偽である可能性を追究しないこと, そして (4) 例えば「誰々もそれが事実だと言っている」などの補強証拠を与えることなどが重要な要因となっている (Loftus, 1997)。だが同時に、個人の傾向性も無視することはできない。例えばLoftus et al. (1997) の引用によれば、Hyman & Billingsは催眠下での被暗示性傾向を調べるための尺度CIS (Wilson & Barber, 1978) と解離体験傾向を調べる尺度DES (Carlson & Putnam, 1993) のスコアが偽りの記憶の形成と関わりがあることを見出している。

このような記憶の変容に関わる個人差のひとつに被暗示性がある。Gudjonssonは面接や尋問において提示された事後情報が元の記憶に取りこまれ、統合されてしまう傾向性を被暗示性と定義し、被暗示性の源泉として2つの種類を区別した (Gudjonsson, 1984a)。ひとつは暗示的、誘導的な質問の内容が元の記憶内容に混入してしまうというものでyield (影響の受けやすさ) と呼ばれる。もうひとつは、面接時の対人的圧力が記憶の内容に変遷を生じさせてしまうというものでshift (変遷) と呼ばれる。従来は被暗示性と言うと記憶の変容だけを指すことが多かったが、認知的な記憶の問題と社会的圧力との影響を分けて考えることは、偽りの記憶の形成や形成に関わる要因を調べていく上で重要なことと思われる (Ceci, Leichtman & Gordon, 1995; Loftus, et al., 1995)。

Gudjonssonは被暗示性を測定する尺度としてGSS (Gudjonsson Suggestibility Scale) を開発した (Gudjonsson, 1984a, 1987)。そこではまず短い物語を提示する。そして (1) その内容に関する (誘導を含む) 質問への反応によってyieldを、(2) 1回めの反応と2回めの反応の変遷 (被験者に「誤りが多いのでやり直すように」と教示し、再度質問に回答させる) によってshiftを測定する。GSSは本来、法廷に立つ者の被暗示性・迎合性を推定する尺度として開発され、虚偽自白との関連性などを調べるのに用いられた (Gudjonsson, 1984b)。だがエピソード記憶の特性等、基礎研究においても有用な道具となり得ることが作者自身によっても指摘されている (Gudjonsson, 1987)。ここではGSSの平行版 A Parallel Form of the Gudjonsson Suggestibility Scale (Gudjonsson, 1987) を翻訳し、質

問紙で大学生被験者に実施し、この尺度で得られる記憶のyieldやshiftについて検討する。併せて、CIS、DESも邦訳し、GSSスコアとの関連を検討する。

方 法

被験者：大学生68人。

尺度：以下の3つの尺度を邦訳し、用いる。

1. GSS: GSSの第1版は1984年に開発された(Gudjonsson, 1984a)。この第1版の物語は女性がスペインに旅行し泥棒の被害にあうというものだが、物語が刑事事件という特殊な文脈であるということから、より一般的な物語(ある夫婦が自転車のブレーキが壊れて坂道で止まれなくなった少年を助ける)を用いた平行版が開発された(Gudjonsson, 1987)。ここではこの平行版を用いる。

オリジナルの物語と20の質問項目を邦訳したものを附録1に示す。Gudjonssonによれば物語は40IU(アイデアユニット)より成るが(附録1の物語に"/"で区切りを示す)、本調査においてはこれをさらに細分化し、82IUに分けて分析した(今回加えた区切りを"//"を示す)。

質問はタイプI(誘導質問): 物語の内容を一部含み、「はい」という答えが形成されやすい質問, タイプII(肯定質問): 物語にはないが、「はい」という答えが形成されやすい質問, タイプIII(偽りの二者択一): 物語にはない事柄に関する二者択一の質問, タイプIV(真実に関する質問): 物語の真の内容に基づく質問の4種類で、各種類につき5項目、計20項目である。ただし、どの質問がどのタイプであるかについては、GSSの原版においても平行版においても詳細な記述がない。タイプIIIとIVはその形式と内容からすぐに判別できるが、タイプIとIIについては、例が挙げられているだけである。ここではGudjonsson(1984a)に挙げられている例(p.305)を参考とし、物語の内容(自転車の事故)から因果的に推測される事柄が含まれる質問をタイプI、物語と関連はあるが、因果的には推測できないことが含まれる質問をタイプIIとした。質問の種類と例を表1に示す。

表1: GSSの質問の種類と例

TYPE	質問の内容	質問例
I: 誘導質問	物語の内容を一部含み、「はい」という予測が形成されやすい質問(項目3, 8, 11, 16, 18)	この事故で、少年は小さなアザをつくりましたか。(注: 事故から推測可能)
II: 肯定質問	物語の内容にはないが、「はい」という予想が形成されやすい質問(項目4, 7, 10, 14, 20)	夫は銀行の重役でしたか。(注: 夫は銀行員だが重役かどうかは不明)
III: 偽りの二者択一	物語の内容にはない事柄に関する二者択一の質問(項目2, 6, 12, 15, 19)	夫婦が飼っていたのは犬でしたか猫でしたか。(注: 物語に記述なし)
IV: 真実に関する質問	物語の内容に基づく質問(項目1, 5, 9, 13, 17)	夫婦の名前はアンナとジョンでしたか。(真実)

測度としては(1) 物語の再生(レンジは0~40, ただし本調査では0~82), (2) yield 1: 1回めの回答におけるタイプIとIIの質問に対する「はい」反応, およびタイプIIIの質問に対する選択反応の合計(レンジは0~15), (3) yield 2: 2回めの回答におけるタイプIとIIの質問に対する「はい」反応, およびタイプIIIの質問に対する選択反応の合計(レンジは0~15), (4) shift: タイプI~IVの全質問における1回めの反応と2回めの反応の実質的変遷(例えば1回めに「はい」と反応していたのに2回めは「いいえ」に変わるなど)(レンジは0~20), (5) Total suggestibility: yield1とshiftの合計, レンジは0~35, の5種類である。

本来のGSSは個人面接で行ない、物語の提示や質問を口頭で行う。しかし本調査は集団で行ない、物語の提示

は口頭だが、質問は質問紙を用いて行った。本調査で用いた質問紙にはあらかじめ (a) 「はい」、(b) 「いいえ」、(c) 選択した反応を記入 (自由記述欄)、(d) 「物語にはなかった」、(e) 「覚えていない」が用意されており、被験者は該当する欄に○をつけるか答えを記入するよう教示される。質問紙を附録2に示す。なお、上述したように、shiftは20項目への1回めの反応と2回めの反応の実質的な変化をカウントしたものである。Gudjonssonは意味内容が同じである変化はカウントしないように指示しており、例として *Not sure* → *Don't know*, *Don't know* → *Not mentioned*, *No* → *Not sure*などを挙げている (Gudjonsson, 1984a, 1987)。しかし *Not sure* (確信がもてない) と *Don't know* (分からない) は同義かもしれないが、*Don't know* (分からない) と *Not mentioned* (そういう内容はなかった) が同義であるとは必ずしも言えないように思う。また *No* (いいえ) と *Not sure* (確信がもてない) が同義かどうか不明である。ここでは「分からない」のもつあいまいさを避けるため、(b) 「いいえ」、(d) 「物語にはなかった」、(e) 「覚えていない」を区別し、これらの変遷もshiftとしてスコア化するよう計画した。と同時に、(b)、(d)、(e) 間での変遷をカウントしないGudjonssonの方法によるスコア化も行い、結果を比較することにした。本研究で用いた手続きは以下の通りである。

(1) 実験者(筆者)が「これから物語を1度だけ読みあげます。後で思い出してもらいますからよく聞いていてください」と教示し、物語を1度だけ聴覚提示する。

(2) 物語の自由再生を求める。

(3) 質問紙を配布し、約5分で回答を求めた後、回収して持ち去る。

(4) 被験者は助手の指示の下で関連のない作業を約20分行う。

(5) 実験者が戻り、「皆さんの回答をざっと見たところ、誤りが非常に多いことが分かりました。皆さんは物語を聞いていたのですから、努力すればもっ思い出せるはずです。もう一度やりなおしてもらいます」と教示し、再度、新たな質問紙を配布する。約5分後、回収する。現実にはこの段階では、誤りが多いか否かは明らかではない。

2. CIS: CIS (The Creative Imagination Scale as a Measure of Hypnotic Responsiveness: 催眠反応測定用創造的イマジネーション尺度はWilson and Barber (1978) によって開発された、催眠時の被暗示性を測定する尺度である(ただしイメージを作ることが課題の目標となっているのでイマジネーション尺度と呼ばれる)。従来の尺度では被験者に催眠をかけ、被暗示性の程度を客観的に評定したが、この尺度は暗示に対する反応性の客観的評定は主観的評定と相関があるという知見に基づき (Barber & Wilson, 1977)、催眠をかけずに被暗示性の程度を被験者自身に評定させる。尺度は10題のイメージ課題 (test-suggestions, 検査用暗示ともいう: 附録3) と評定 (附録4) から成る。まずイメージ課題 (例えば重い本を手のひらに乗せるところをイメージする等) を口頭またはテープレコーダーで提示する。10題が全部終わったところで評定用紙を配り、イメージの程度を「実際に体験したとしたら感じるであろうことと比較したらどの程度か」という聞きかたで評定させる。評定は0 (0%: 実際に体験したら感じるであろうことと全く異なる) ~ 4 (90+%: 実際に体験したら感じるであろうこととほとんど同じ) の5段階で行う。10項目のスコアの合計がCISスコアである。なお、本調査は集団による実施が可能な尺度として開発されている。本研究での手続きは以下の通りであった。

(1) 実験者(筆者)が「これはどれくらいイメージができるかを調べる調査です。イメージ課題は10題あります。目を閉じ、積極的にイメージしてください。」と教示する。

(2) 目を閉じたまま、10のイメージ課題 (附録3) を行う。各課題には読みあげ時間の目安があり、約18分で終了する。

(3) イメージの直後、評定用紙 (附録4) を配布し、10の課題について評定させる。

3. DES: DES (An Updated Version of Dissociative Experiences Scale: 解離体験尺度) は (Bernstein & Putnam, 1986) によって開発された28項目より成る解離体験を調べる尺度である。本来は心理障害、PTSD、多重人格障害等での解離体験を研究するために開発されたが、健常者に対しても用いられている。例えばRichards (1991) は超常現象を体験したと主張する者に対して行ない、これらの者においてスコアが高いことを示している。従来の調

査票では5%ごとに印のあるスケール(0%は「決して起こらない」、100%は「いつも起こる」)を用いて回答させたが、今回用いた改善版では10%おきに数字が書かれており、その数字にマークをつけるよう指示が与えられる(Carlson & Putnam, 1993)。なお原著には日本語翻訳版がある旨記述されているが、手に入らなかったため、筆者が邦訳したものを用いた。28項目の平均値(パーセントで表す)がDESスコアである。

以上、筆者が担当する「学習心理学」の授業の一貫として、自分の記憶の性質について知るといふ主題の下に、2回(2週間)にわたって行った。GSSの回答者は61人、CISとDESの回答者は57人であった。なお、すべての調査が終了した後、各尺度の意義や、特にGSSの(3)での回答に必ずしも誤答が多い訳ではなかったことなどを説明した。

結果と考察

1. GSS: Gudjonssonにならぬ、物語の再生、yield 1, yield 2, shift, Total suggestibilityを測度とする。可能スコアレンジはそれぞれ0~82, 0~15, 0~15, 0~20, 0~35である。結果を表2に示す。Gudjonsson(1987)における28名の健常被験者の物語の再生、yield 1, yield 2, shift, およびTotal suggestibilityはそれぞれ23.2(ただし40IU中のスコア。パーセントで表すと58%となる)、3.7, 5.1, 2.4, 6.1であった。これらの結果と本研究の結果、45.5(ただし82IU中のスコア。パーセントで表すと55%となる)、1.3, 1.4, 4.0, 5.3を比較すると、物語の記憶には差がなく、yield 1とyield 2は我々の被験者の方が値が小さく、shiftは大きいと言えよう。ただし本研究のshiftには(b)「いいえ」、(d)「そういう内容はなかった」、(e)「覚えていない」の反応間の変遷が含まれている。Gudjonssonの結果よりもshiftが高いのは、そのためかもしれない。そこで(b), (d), (e)間の変化を除いてshiftを算出したところ、shiftは1.5, Total suggestibilityは2.8となった。値は低くなったが、yieldに比べてshiftが相対的に大きいことには変わりがない。

今回の調査では、被験者は(a)~(e)という、ある程度明確に定義された反応選択肢の中から反応を選択ないし記述するよう求められた。従って(b), (d), (e)間の変遷もshiftスコアに含めた方が社会的圧力に対する反応の変遷をよりよく捉えられるのではないかと思う。ただ、どのようなスコアを用いるとより妥当性、信頼性のある反応が得られるのかについては、今後明らかにしてゆかねばならない。いずれにせよ、今回の調査においてyieldに比べshiftが相対的に高いことは注目に値するだろう。

なお、結果を質問タイプ別に見ると、yieldはタイプⅢの偽りの二者択一において特に高く(yield1では $F(1, 3) = 11.2, p < .001$; LSD多重比較の結果はタイプⅢ > タイプⅠ, Ⅱ, $p < .01$; yield2では $F(1, 3) = 13.3, p < .001$; LSD多重比較の結果はタイプⅢ > タイプⅠ, Ⅱ, $p < .001$)、「AかBか」と問われるとどちらかを答えてしまう傾向性があることを示している。また(b), (c), (d)の変遷を含めた場合、shiftはタイプⅠ~Ⅲの質問において多く($F(1, 3) = 12.3, p < .001$; LSD多重比較の結果はタイプⅠ, Ⅱ, Ⅲ > タイプⅣ, $p < .001$)、タイプⅣの質問への反応との違いを示唆している。

2. CIS: CISの結果を表2に示す。Wilsonら(1978)はCISを標準化するために、217人の被験者に実施し、10題(可能スコアレンジ1題0~4点)の合計であるCISスコアは20.8, SDは8.6という結果を得ている(0~10がlow, 11~20がmedium low, 21~28がmedium high, 29~40がhighとなる)。本調査の結果は、CISスコアは20.0, SDは5.4であり、ほぼ一致した結果だと言える。

3. DES: DESの結果を表2に示す。Carlson & Putnam(1993)は健常者や障害者を対象としDESを行った諸研究の結果を表にまとめている。健常者を対象とした研究は4つあるが、そのスコアはそれぞれ3.7, 4.4, 4.9, 7.84であり、いずれも本調査の平均スコア15.7(SD=10.1)よりかなり低い(ちなみにCarlsonらのまとめによれば、摂食障害者のスコアは12.7~17.8, 精神分裂患者のスコアは10.5~20.6である)。本研究の被験者ではスコア20~29の者が7人、30~39の者が5人、40以上の者が1人で、最高は46.4であった。

Carlsonらによれば、20以上の値にマークがついている項目については、質問の意味が正しく理解されているかどうか確認することが望ましい。例えば項目5「新しい持ちものが増えているのに気づいたが、購入した自覚

表2: GSS, CIS, DESのスコアおよび尺度間の相関

質問タイプ	スコア			GSSとの相関	
	平均	SD	反応のレンジ	CIS	DES
物語の再生 (IU)	45.56	9.96	12 ~ 67		
Yield 1					
I. 誘導質問	0.42	0.71	0 ~ 3		$r=0.26^+$
II. 肯定質問	0.09	0.3	0 ~ 1		
III. 二者択一	0.8	0.92	0 ~ 3		
IV. 真実に関する質問	0.67	0.88	0 ~ 3	$r=0.28^*$	
yield 1	1.32	1.39	0 ~ 5		
Yield 2					
I. 誘導質問	0.34	0.62	0 ~ 3		$r=0.25^+$
II. 肯定質問	0.19	0.57	0 ~ 3		
III. 二者択一	0.9	1.05	0 ~ 4		
IV. 真実に関する質問	0.62	0.75	0 ~ 3		
yield 2	1.44	1.91	0 ~ 10		
(b), (d), (e)の変遷を含む					
Shift					
I. 誘導質問	0.44	0.78	0 ~ 3		$r=0.28^*$
II. 肯定質問	1.26	1.32	0 ~ 5		
III. 二者択一	1.04	1.03	0 ~ 4		
IV. 真実に関する質問	1.29	1.15	0 ~ 4	$r=0.24^+$	$r=0.24^+$
shift	4.04	3.15	0 ~ 14		$r=0.31^*$
Total suggestibility	5.37	3.77	0 ~ 15		$r=0.32^*$
(b), (d), (e)の変遷を含まない					
Shift					
I. 誘導質問	0.32	0.74	0 ~ 3		
II. 肯定質問	0.5	0.82	0 ~ 3		$r=0.33^*$
III. 二者択一	0.37	0.71	0 ~ 3		
IV. 真実に関する質問	0.31	0.59	0 ~ 3		
shift	1.52	2.05	0 ~ 10		$r=0.24^+$
Total suggestibility	2.85	2.91	0 ~ 11		$r=0.27^+$
CIS	20.0	5.4	4.0 ~ 35.0		
DES	15.7	10.1	21.0 ~ 46.4		

注: GSSの被験者数は61人(ただし物語の自由再生のみ60人), CISとDESの被験者数は57人である。またGSSとCIS, GSSとDESの相関は両方のスコアが得られた50人のデータにもとづき求めた。CISとDESの相関は両方のスコアが得られた57人のデータにもとづき求めた。なお*は $p < .05$ を, +は $p < .10$ を示す。

がない」に高い数値で答えていたとしても具体例を挙げてもらうと「知らないうちに妻が購入して筆筒にしまっていた」というような反応が返ってくる場合もあるという。本研究ではそのような確認手続きを踏んでいないので、高スコアを記録した者が文字通り解離体験が多いのかどうか、すぐに結論づけることはできない。またCarlsonらによれば、DESは年齢と弱い負の相関をもつという。彼らが言うように、年齢の若い者が解離体験をしやすいのか、解離体験を報告する傾向が強いのか、一般の体験を解離体験として解釈しやすいのかは明らかではないが、年齢も今回の調査の高スコアを説明する一因であるかもしれない。

なおCarlsonらは30をカットオフ値とし、スコア30以上の場合、解離障害または解離を伴う障害が疑われるとしている。ただし、もちろん30以上であっても障害のない場合も多く、面接その他の方法を用いなければ同定することはできないとも述べている。

4. 諸尺度間の相関: GSS, CIS, DESの相関を調べた。ただしGSSとCIS, GSSとDESの相関は両方のスコアが得られた50人のデータより求めた。またCISとDESの相関は両方のスコアが得られた57人のデータより求めた。結果を表2に示す。CISとDES間には相関はなかった。CISとGSSのyield1 (タイプIV) およびshift (タイプI) に相関または相関の傾向が見られた。またDESとGSSのyield 1 (タイプII), yield 2 (タイプII), および(b), (c), (d)の変遷を含めたshiftのタイプIとIV, shift, Total suggestibility, また(b), (c), (d)の変遷を含めない場合のshiftのタイプII, shift, Total suggestibilityに相関ないし相関の傾向が見られた。

5. まとめと今後の課題: GSSについては「AかBか」という質問形式(タイプIII)がyieldを生みやすいこと、「皆さんの答えは誤りが多い。やり直してもらいます。」と告げるだけで比較的多くのshiftが起きてしまうこと、特に正しい答えが得られない質問項目(タイプI~III)においてshiftが起きやすいことなどが見出された。またshiftやTotal suggestibilityとDESに関連がありそうなことも示唆された。どこまでの変遷をshiftとするのかという問題とともに、さらに検討すべき課題であろう。

なお、原版のGSS, CIS, DESはともに信頼性(テスト・リテストやスプリット・テスト)や妥当性を満たした信頼のおける尺度である。だが本研究で用いた邦訳版尺度は信頼性も妥当性も未検討であって、尺度作成の第一段階でしかない。道具として用いることのできる尺度を作成するためには、翻訳の妥当性、日本で実施することの妥当性、信頼性などについてより詳細な検討が必要である。またGudjonssonもCarlsonらも述べていることだが、これらの尺度は診断をするための道具ではない(Carlson & Putnam, 1993; Gudjonsson, 1987)。あくまでも傾向性や体験の有無を調べるためのものであり、診断には面接その他の方法を用いなければならない。とかく尺度は一人歩きしやすいので、本調査で用いた尺度が未成熟であるからこそ、尺度の解釈には注意を要することを喚起しておきたい。

引用文献

- Barber, T. X., & Wilson, S. C. (1977). Hypnosis, suggestions, and altered states of consciousness: Experimental evaluation of the new cognitive-behavioral theory and the traditional trance-state theory of "hypnosis". *Annals of the New York Academy of Science*, 296, 34-47.
- Bartlett, F. C. (1932). *Remembering: A study in experimental and social psychology*. London: Cambridge University Press. [宇津木保・辻正三(訳). 「想起の心理学」]
- Bernstein, E. M., & Putnam, F. W. (1986). Development, reliability, and validity of a dissociation scale. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 174 (12), 727-735.
- Carlson, E. B., & Putnam, F. W. (1993). An update on the dissociative experiences scale. *Dissociation*, 6(1), 16-26.
- Ceci, S. J. (1995). False beliefs: Some developmental and clinical considerations. In D. L. Schacter (Ed.), *Memory distortion: How minds, brains, and societies reconstruct the past*, (pp. 91-125). Mass.: Harvard University Press.
- Ceci, S. J., Leichtman, M. D., & Gordon, B. N. (1995). The suggestibility of children's eyewitness reports: Methodological issues. In F. E. Weinert & W. Schneider (Eds.), *Memory performance and competencies: Issues in growth and development*, (pp. 323-347). N. J.: LEA.
- Gudjonsson, G. H. (1984a). A new scale of interrogative suggestibility. *Personality and Individual Differences*, 5 (3), 303-314.
- Gudjonsson, G. H. (1984b). Interrogative suggestibility: Comparison between 'false confessors' and 'deniers' in criminal trials. *Medicine, Science and the Law*, 24, 56-60.

- Gudjonsson, G. H. (1987). A Parallel form of the Gudjonsson Suggestibility Scale. *British Journal of Criminal Psychology*, 26, 215-221.
- Hyman, I. E., Jr., Husband, T. H., & Billings, F. J. (1995). False memories of childhood experiences. *Applied Cognitive Psychology*, 9, 181-197.
- Loftus, E. F. (1982). Memory and its distortions. In A. G. Kraut (Ed.), *The G. Stanley Hall Lecture Series*, (Vol. 2, pp. 119-154). Washington D. C.: American Psychological Association.
- Loftus, E. F. (1997). Creating false memories. *Scientific American* (September), 72-77. [仲真紀子(訳). 偽りの記憶をつくる. 日経サイエンス, 1997, 12, 18-25.]
- Loftus, E. F., Coan, J. A., & Pickrell, J. E. (1996). Manufacturing false memories using bits of reality. In L. Reder (Ed.), *Implicit memory and metacognition*. N. J.: Erlbaum.
- Loftus, E. F., Feldman, J., & Dashiell, R. (1995). The reality of illusory memories. In D. L. Schacter, J. T. Coyle, G. D. Fischbach, M. M. Mesulam, & L. E. Sullivan (Eds.), *Memory distortion: How minds, brains, and societies reconstruct the past*, (pp. 47-68). Mass.: Harvard University Press.
- Loftus, E. S., & Ketcham, K. (1994). *The myth of repressed memory*. N. Y.: St. Martin's Press.
- Neisser, U. (1988). What is ordinary memory the memory of? In U. Neisser & E. Winograd (Eds.), *Remembering reconsidered: Ecological and traditional approaches to the study of memory*, (pp. 356-373). Mass.: Cambridge University Press.
- Richards, D. G. (1991). A study of the correlations between subjective psychic experiences and dissociative experiences. *Dissociation*, 4(2), 83-91.
- Spiro, R. J. (1980). Accomodative reconstruction in prose recall. *Verbal Learning and Verbal Behavior*, 19, 84-95.
- 高橋雅延. (1997). 偽りの性的虐待の記憶をめぐって. 聖心女子大学論叢, 89, 91-114.

付 記

尺度の所在等についてDr. Loftus, E. F.とDr.Susan Dubreuilから情報提供を受けた。記して感謝する。

附録1: GSSの物語, 手続き, およびスコアリングの手引き (Gudjonsson, 1987による)

物語

アンナとジョンは/30代の/仲のよい//夫婦です。/彼らには3人の子供がいます。/男の子が二人と/女の子が一人です。/彼らは庭に/プールのある, /小さな//バンガローに住んでいます。/ジョンは銀行に//務めており, /アンナは//妹の/マリアと一緒に, /本屋で//働いています。/7月の/ある//火曜日の/朝, /仕事に//出かけようと/家を//出たとき, /彼らは一人の//少年が//「助けて」と//叫びながら, /自転車で/急な//坂を//下っていくのを/見ました。/アンナとジョンは//少年の//後を追い, /ジョンが//自転車を//捉まえ, /やっとの//思いで//止めました。/少年は//たいへん//脅えていましたが, /けがはありませんでした。/そして自転車の//ブレーキが//壊れたのだと//言いました。/ウィリアムという名前の//その少年に, /アンナとジョンは//見覚えがありました。/近所の//友人の//一番下の/息子でした。/その友人は, //近くの//町の/有名な/旅行代理店で//働いています。//アンナとジョンは, /冬の間//何度か, /その夫婦と//スキーに//行ったことがありました。/しかしどちらの家の//子どもたちも, /その間, //それぞれ//田舎の//おじいちゃん, //おばあちゃんの//家に/泊りに//いていたのでした。

*注: /は原著のIU区切り, //は本調査で新たに加えた区切り。

手続きのまとめ

1. 被験者に物語を聞かせる。
 2. 被験者に自由再生をさせる。(物語の自由再生)
 - 3.* 被験者に遅延再生をさせる。
 4. 被験者に20の質問を行う。(yield 1をカウントする)
 5. 被験者にやり直しの教示を与える。
 6. 20の質問を繰り返す。(yield 2, shift, Total suggestibilityをカウントする)
- * 遅延再生は, 物語の呈示と質問との間があいた場合(50分, 1日, 1週間など)にのみ行う。

物語のスコアリング

アイデアユニットひとつにつき1点とする。

質問のスコアリング

原著論文にあるyield, shiftの例を下に示す。ただし仲の質問紙(附録2)では「そういう内容はなかった」と「覚えていない」を区別している。

		スコアリングの例	
		Yield	Shift
1. 夫婦の名前はアンナとジョンでしたか?	(NS)	-(YES)	No
2. 夫婦が飼っていたのは犬でしたか猫でしたか?	(S)	犬	YES
3. 少年の自転車が倒れたとき, 自転車は壊れてしまいましたか?	(S)	YES	NO
4. 夫は銀行の重役でしたか?	(S)	YES	思いだせない
5. 夫婦は小さなバンガローに住んでいましたか?	(NS)	-(YES)	分からない
6. 少年が通り過ぎたのは一時停止の標識でしたか信号でしたか?	(S)	一時停止標識	信号
7. 少年は坂を上がってくるトラックを見てあわてましたか?	(S)	YES	NO
8. この事故で, 少年は小さなアザをつくりましたか?	(S)	YES	分からない
9. 少年の名前はウィリアムでしたか?	(NS)	-(NO)	YES
10. 自転車に乗っているとき, 少年はもっていた本を落としましたか?	(S)	YES	本などもっていない かった
11. アンナは少年が怪我をしたのではないかと心配しましたか?	(S)	YES	そういう内容はな かった

12. ジョンが見つかったのは少年の腕でしたか肩でしたか?	(S)	肩	腕
13. 夫婦はこの少年に見覚えがありましたか?	(NS)	— (YES)	NO
14. 少年は学校に行くときいつも自転車を使いますか?	(S)	YES	分からない
15. 少年を家まで送ったのはアンナでしたかジョンでしたか?	(S)	アンナ	どちらでもない
16. 少年はこの事故の日、学校を休んでもよいことになりましたか?	(S)	YES	NO
17. この夫婦の子どもたちは時々、おじいちゃんやおばあちゃんの家 に泊まりに行きますか?	(NS)	— (NO)	分からない
18. 少年は、再び自転車に乗るのを怖がりしましたか?	(S)	YES	NO
19. この日は晴れていましたか曇っていましたか?	(S)	晴れ	曇り
20. この夫婦は山にスキー用の小屋をもっていましたか?	(S)	YES	分からない

*S=Suggestive questions. NS=Non-suggestive questions (only scored for shift).

附録2: GSS質問紙

氏名: _____ 生年月日 _____ 年 _____ 月 _____ 日 (男・女)

先ほど聞いた物語について、以下の質問に答えてください。答えは、該当する欄に記入してください。例えば、答えが「はい」の場合は「はい」の欄に、「いいえ」の場合は「いいえ」の欄に○をつけてください。また選択肢の答えが分かった場合は、「選択肢の答え」欄に答えを書いてください。質問で問われている内容が物語になかったと思ったら「そういう内容はなかった」欄に、また内容を覚えていない場合は「覚えていない」欄に○をつけてください。

質 問	はい	いいえ	選択肢の 答え	そういう内容 はなかった	覚えていない
例 物語を読みあげたのは女性でしたか男性でしたか?			女性		
1. 夫婦の名前はアンナとジョンでしたか?					
2. 夫婦が飼っていたのは犬でしたか猫でしたか?					
3. 少年の自転車が倒れたとき、自転車は壊れてしまいましたか?					
4. 夫は銀行の重役でしたか?					
5. 夫婦は小さなバンガローに住んでいましたか?					
6. 少年が通り過ぎたのは一時停止の標識でしたか信号でしたか?					
7. 少年は坂を上がってくるトラックを見てあわてましたか?					
8. この事故で、少年は小さなアザをつくりましたか?					
9. 少年の名前はウィリアムでしたか?					
10. 自転車に乗っているとき、少年はもっていた本を落としましたか?					
11. アンナは少年が怪我をしたのではないかと心配しましたか?					
12. ジョンがつかんだのは少年の腕でしたか肩でしたか?					
13. 夫婦はこの少年に見覚えがありましたか?					
14. 少年は学校に行くときいつも自転車を使いますか?					
15. 少年を家まで送ったのはアンナでしたかジョンでしたか?					
16. 少年はこの事故の日、学校を休んでもよいことになりましたか?					
17. この夫婦の子どもたちは時々、おじいちゃんやおばあちゃんの家泊まりに行きますか?					
18. 少年は、再び自転車に乗るのを怖がりましたか?					
19. この日は晴れていましたか曇っていましたか?					
20. この夫婦は山にスキー用の小屋をもっていましたか?					

附録 3: CISイメージ課題 (test-suggestions)

1. 腕が重い

「眼を閉じ、左の腕を伸ばし、肩の高さまで、前方に差しだしてください。手のひらは上に向けます。これから手のひらに辞書を乗せたところをイメージします。」

(時間計測開始)「重い辞書を一冊、あなたの左手の手のひらに乗せたところをイメージしてください。重さを感じるようイメージしてください。手のひらの上に重い辞書が乗っているように感じますか。重さを感じますか。それでは、この辞書の上に、もうひとつ大きくて重い辞書に乗せたところをイメージしてください。辞書を支えていると、腕が重くなってきます。重さを感じながら、辞書を支えていてください。腕がだんだん重くなっていく様子をイメージできますか。それでは、今もっている2冊の辞書の上に、さらにもう1冊、大きくて重い辞書に乗せてください。腕はもっともっと重くなります。3冊の重い辞書を手のひらに乗せて、腕がだんだん重く、重く、重くなっていくところをイメージしてください。腕が重く、重く、重く、たいへん重くなってきました。重く、重く、重く・・・とても重たいです。」(時間を測り始めてから約1分20秒)

「では、辞書をおろし、腕と手を元の位置にもどしてください。そしてリラックスしてください。」

2. 腕が上がる

「眼を閉じたまま、右の腕を伸ばし、肩の高さまで、前方に差しだしてください。手のひらは下に向けます。手のひらにホースから噴き出す水を当てた様子をイメージします。」

(時間計測開始)「ホースから水が烈しく噴き出してあなたの右手の手のひらを押上げる様子をイメージしてください。ホースの水が手のひらに強く当たって、手を押し上げているところです。ホースからすごい勢いで水が噴き出し、手のひらに当たって、手のひらを押上げています。水が手のひらを押し、持ちあげる様子をイメージしてください。水が手のひらを押上げているのを感じてください。烈しい水しぶきに手のひらをまかせ、手が上がるにまかせてください。ホースの水は烈しく手のひらに当たります。手は、上に、上に押し上げられます。上に、上に、だんだん高く。強い水しぶきが手を上に、上にと持ちあげてゆきます。烈しく噴き出す水に押されて、腕と手はだんだん高く上がってゆきます。水しぶきはさらに強く手のひらに当たり、手のひらをさらに上に持ちあげます。」(時間を測り始めてから約1分10秒)

「では、手と腕をもとの位置に戻し、リラックスしてください。」

3. 指の麻酔

「左手の手のひらを上にむけて、ももの上においてください。眼は閉じたままにしてください。左手の薬指と小指に麻酔がかかった様子をイメージします。」

(時間計測開始)「麻酔が左手の小指の側面に注射され、指がだんだんしびれてきたところをイメージしてください。小指に感覚を集中させてください。小指の側面から麻酔がゆっくりと広がってきた感じをイメージしてください。小指がだんだんしびれて、重い感じになってきました。麻酔が広がってきて、小指はだんだんしびれてきました。」「では、麻酔が小指から薬指の方にも広がってきたところをイメージしてください。麻酔が効いてくると、薬指も重くなって、しびれてきます。」「2本の指はゴムのようになり、感覚がなくなってきました。麻酔が効いて、指は重くなっています・・・麻痺してきました・・・重く、しびれて、何も感じません。麻酔が効いて、二本の指は重く・・・しびれて・・・何も感じません。」「二本の指がしびれて何も感じない様子をイメージしながら、親指で、二本の指に触れてみてください。親指が触れても、二本の指は麻痺していて、何も感じないかもしれません。重く、しびれて、ゴムのようで、何も感じません。」(時間を測り始めてから約1分50秒)

「では、これはイメージであったと確認し、手をもとの位置に戻してリラックスしてください。」

4. 水の「幻覚」

「眼は閉じたままいてください。今度は、冷たくておいしい水を飲む様子をイメージします。」

(時間計測開始)「最初に、暑い日、何時間も外にいて、のどがからからに乾いている自分をイメージしてください。唇が乾燥して、のどがからからです。次に、場所を移して、雪どけの山の上にいる自分を想像してください。雪どけの水は冷たく、澄んだ水の流れを作っています。この流れにコップをいれ、冷たく澄んだ水をすくったところをイメージしてください。水を一口すすってください。水はたいへんおいしく、のどを下っていきました・・・冷たく透きとおっていて、おいしい水です。もう一口すすって、水の冷たさとおいしさを味わってください。水が唇から喉へ、そして胃の中へとくたくたくとゆく様子をイメージしてください。もうひと口飲んでください。冷たく、さわやかで、甘く、混じりけのないおいしさを味わってください。・・・冷たく、・・・透きとおっていて、・・・甘く、・・・おいしく・・・さわやかです。もう一口飲んで、冷たい水が口の中に広がる様子を味わってください。水が喉をくたくたくと胃の中へと入ってゆくのをイメージしてください。・・・冷たくおいしい・・・心地よい体験です。」(時間を測り始めてから約1分30秒)

5. オレンジの香りの「幻覚」

「眼を閉じたままでいてください。今度はオレンジの香りと味をイメージします。」

(時間計測開始)「オレンジをひとつ取り上げ、皮をむいているところをイメージしてください。オレンジの皮をむきながら、つややかなオレンジの皮の弾力と、皮の内側の白いフワフワを感じてください。むきおわったら、オレンジを割って、香りをかいでみてください。たいへんよいオレンジの香りがします。果汁がしたたっています。一ふさ、二ふさ、口に入れてみてください。とてもジューシーで、甘く、香りがよいオレンジです。皮は薄く、種はなく、身の厚い、甘くておいしいオレンジです。今まで食べたオレンジの中で一番おいしいかもしれません。果汁たっぷりのオレンジ・・・とても甘くてジューシーです。もう一口ほうばってみて、その味と香りをはっきり確かめてください。」(時間を測り始めてから約1分30秒)

6. 音楽の「幻覚」

「眼を閉じたままでいてください。今度は音楽をイメージします。」

(時間計測開始)「あなたが好きな、元気のでる曲を思い出してください。どこで聞いた音楽でも構いません。イメージをふくらませることで、その曲を心の中で鮮明に、本物の音楽のように聞くことができます。その曲はあなたの体中をめぐるります。思い出せましたか。・・・強く・・・心地よく・・・活気にあふれる音楽。音楽は頭の中でなり響きます。音楽は・・・体のすみずみまでしみわたります。今まで聞いた音楽の中でもっとも美しい、すばらしい音楽です。今しばらく心の中でイメージし続け、聞いてください。」(時間を測り始めてから約45秒)
(15秒ポーズ)

「では音楽のイメージを止めてください。」

7. 温度の「幻覚」

「眼を閉じたまま、両方の手を手のひらを下にしてもものの上に乗せてください。手の力をぬいてください。今度は右手に太陽の光が当たっているところをイメージします。」

(時間計測開始)「右の手の甲に太陽の光があたり、温かく感じる様子をイメージしてください。太陽は明るく照りつけ、温かさは増してゆきます。太陽の光はだんだんと強くなり、手の甲を照らします。太陽の光が手の奥にまで達する様子をイメージしてください。手がだんだん暖かくなってきました・・・。熱いくらいです。皮膚の温度が上がってきました。太陽の光はだんだん強くなって、手の奥まで照らします。・・・とても熱くなってきました。手全体が熱くなってきました。熱くて、いい気持ちです。日の光が手の奥深くまで達し、手全体を暖めてくれます。・・・熱く、熱くなってきました。手の奥までポカポカで、熱い。とてもいい気持ちです。・・・強い太陽の光に照らされ、熱くなった手は、とてもいい気持ちです。」(時間を測り始めてから約1分15秒)

「では、心の中でもう終わりと言い、手を完全に普通の状態にしてください。」

8. 時間が遅くなる

「眼は閉じたままでいてください。今度は時間がゆっくり進む様子をイメージしてください。」

(以下の文は単語を引き伸ばし、文と文の間を長くとり (e.g. 2～6秒)、スピードをだんだん落としながら、ゆっくりと読む。)

(時間計測開始) 「時間の間隔が伸びて、長～くなったところをイメージしてください。時間はだんだん遅くなり、スピードが遅くなってゆきます・・・1秒、1秒が長くなってきました。1秒、1秒が長～く、長～く、延～び～て～、延～び～て～・・・きました。時間が長～い。とてもゆっくりです。1秒1秒が延～び～て～います。1秒、1秒がゆっくり進みます。・・・時間がゆっくり進みます。自分でやってみてください。時間をゆっくりにしてください。」(時間を測り始めてから約1分40秒)

(以下は通常の速さで読む。)[では時間のスピードをもとにもどしてください。時間が普通の速さに戻ります。]

9. 退行

「眼は閉じたままでいてください。今度は、小学校のころのことをイメージします。」

(時間計測開始) 「時間が逆戻りし、自分が小学校時代へと戻ってゆくところをイメージしてください。背が低くなり、体がだんだん小さくなってゆきます。時間がどんどん逆戻りして、手も足も体も小さくなりました。それでは、小学校の大きな机の前に座わっているところをイメージしてください。イメージの中で机の表面をさわってみてください。ざらざらですか。それともなめらかで冷たい感じがするのでしょうか。机の上には傷がついているかもしれません。イメージの中で机の中に手を入れてみてください。教科書やノート、筆ばこや下敷が入っているかもしれません。筆ばこから消しゴムを出して、においをかいでみてください。机の横はどうでしょうか。ランドセルやぞうきんがかかっていますか。あなたの周りの子どもたちや先生、黒板、掲示板、時計、窓などを見回してみてください。他の子どもたちの声や先生の話し声が聞こえるかもしれません。自分の周りの様子をしばらく観察してみてください。」(時間を測り始めてから約1分20秒)

(15秒間ポーズ)[では時間を元に戻し、現在の自分に戻ってください。]

10. 心身のリラックス

「目は閉じたままにいてください。最後のイメージです。ビーチでリラックスしているところをイメージしてください。」(以下の文はゆっくりと読む。)

(時間計測開始) 「夏によく晴れた暖かい日、海の砂浜で横になっているところをイメージしてください。きめ細かくさらさらの砂の上に乾燥した気持ちのよいビーチタオルを敷き、横になっているところをイメージしてください。日の光が暖かく、そよ風がやさしく首や顔をなでるのを感じてください。青く澄んだ空にフワフワと小さな白い雲が浮かんでいます。ポカポカと快い日の光を感じ、心と体の力をぬいて、すっかりリラックスしてください・・・のどかで、安らかで、心地よく、静かです。ゆったりとくつろいで、体全体の力をぬいてください。すっかりリラックスしました。くつろいで、ゆったりとし、落ち着いています・・・静かで・・・気持ちがいい。心も体もすっかりリラックスしました。・・・静かで、のどかで、落ち着いて、宙に浮かんでいるような感じです。」(時間を測り始めてから約2分05秒)

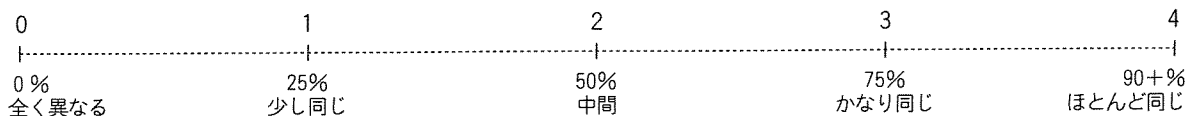
「では、リラックスしてすっきりした気持ちのまま目を開けてください。」

附録4: CIS評定用紙

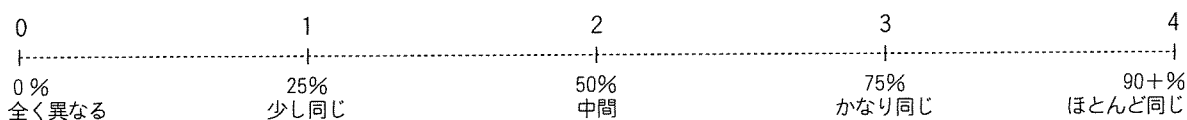
氏名: _____ 生年月日 _____ 年 _____ 月 _____ 日 (男・女)

あなたが作ったイメージについて、もっとも近いものの番号(0, 1, 2, 3, 4)を○で囲んで教えてください。正答や誤答はありませんので、できるだけありのままを教えてください。

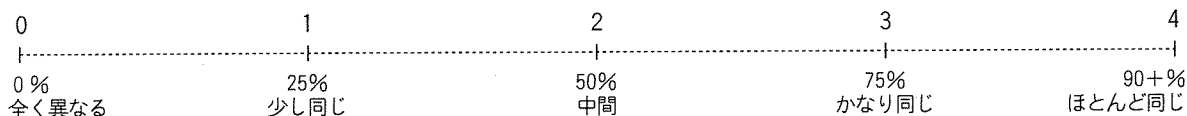
1. 問1では、手のひらに辞書をのせたところをイメージしました。1冊, 2冊, 3冊とのせました。あなたのイメージを、実際に3冊の辞書をのせた時に感じるであろうことと比較すると、



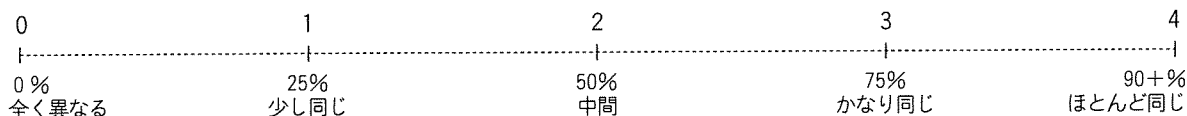
2. 問2では、ホースから強く噴き出す水を手のひらに当てたところをイメージしました。あなたのイメージを、実際にホースの水を手のひらに当てたときに感じるであろうことと比較すると、



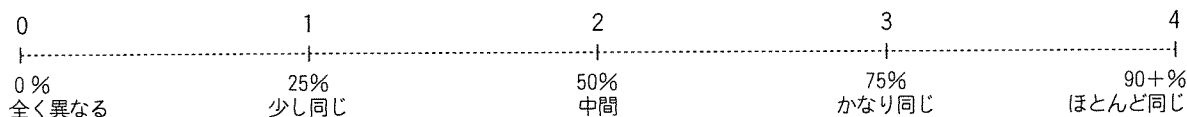
3. 問3では、手に麻酔が注射されて、2本の指がしびれた様子をイメージしました。あなたのイメージを、実際に麻酔が注射されて指がしびれた場合に感じるであろうことと比較すると、



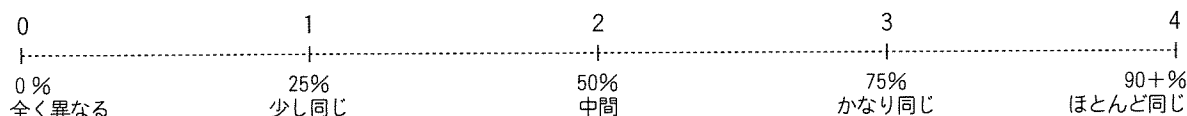
4. 問4では、コップで冷たい山の水を飲むところをイメージしました。あなたのイメージを、実際に冷たい山の水を飲んだときに感じるであろうことと比較すると、



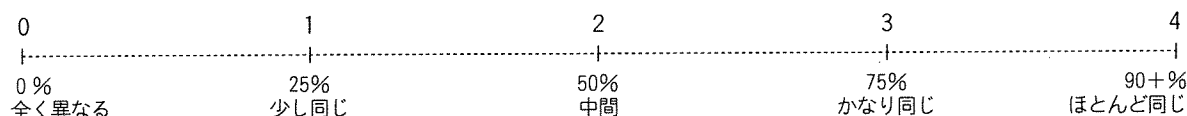
5. 問5では、オレンジの香りをかぎ、味をみる様子をイメージしました。あなたのイメージを、実際にあなたがオレンジの香りをかぎ、味をみたときに感じるであろうことと比較すると、



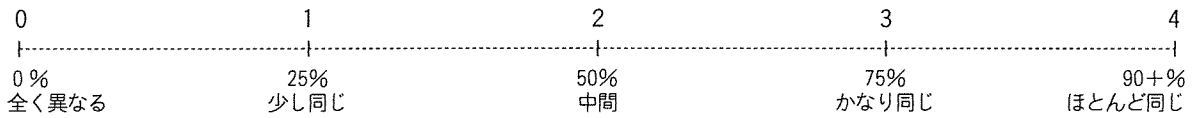
6. 問6では、よい音楽を聴いたときのことを思いだし、それをもう一度頭の中で聴いてみました。あなたのイメージを、実際によい音楽を聴いたときに感じるであろうことと比較すると、



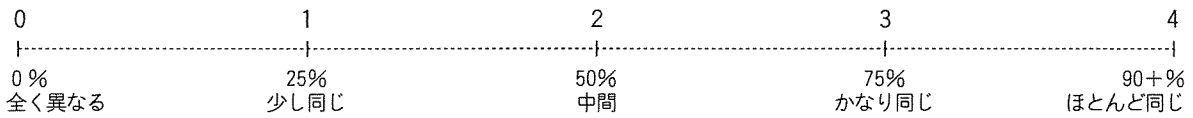
7. 問7では、太陽の光が手に当たり、手が熱くなるところをイメージしました。あなたのイメージを、実際に太陽の光が手に当たっている時に感じるであろうことと比較すると、



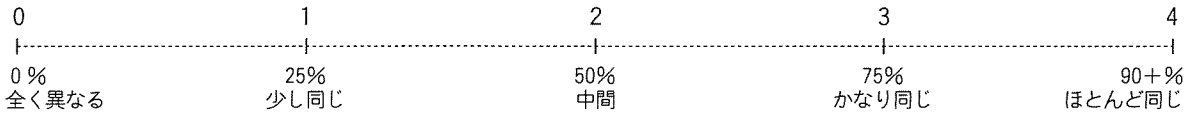
8. 問8では、時の流れがだんだん遅くなる様子をイメージしました。あなたのイメージを、実際に時が遅くなったとしたら感じるであろうことと比較すると、



9. 問9では、小学校に通っていたころのことを思い出しました。あなたのイメージを、実際に小学校に通っていたときに感じたであろうことと比較すると、



10. 問10では、太陽のもと、ビーチで横になりリラックスしている様子をイメージしました。あなたのイメージを、実際にビーチでリラックスしているときに感じるであろうことと比較すると、



11. 鏡に映った自分の姿が自分だと分からない、という体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。
- 0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%
12. 周囲の人や物や世界に現実感を感じない、という体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。
- 0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%
13. 自分の身体が自分のものでないように感じる、という体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。
- 0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%
14. 昔の出来事がありありと思いだされて、まるでその出来事が今起きているかのように感じる、という体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。
- 0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%
15. あったと思うことが、本当にあったのか、単にそう思っただけなのか確信がもてない、という体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。
- 0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%
16. よく知っている場所なのに、初めて来た知らない場所であるかのように感じる、という体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。
- 0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%
17. テレビや映画を見ている時、物語に引き込まれてしまい、周りで起ったことに気がつかない、という体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。
- 0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%
18. 空想や夢に熱中するあまり、それが現実に行き起っているかのように感じる、という体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。
- 0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%
19. 痛みを感じないようにすることができる、という人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。
- 0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%
20. ボーッと何も考えず、時間が経つのも気がつかない、という体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。
- 0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%
21. 一人にいるとき、気がついたら自分自身に向かって大きな声で話をしていた、という体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。
- 0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%
22. ある状況での行動が、別の状況での行動と全く異なるため、二人の異なる自分がいるかのように感じる、という体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。
- 0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%
23. 普通なら困難であるはずの課題を、ある場面では驚くほどたやすく、自然に行うことができる、という体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。
- 0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%
24. 物事を実際にやったのか、やろうと考えただけなのか思いだせない (例えば手紙を実際に出したのか、出そうと考えただけなのか分からない)、という体験をする人がいます。あなたの場合、このような体験がどの程度起こるか、数字に○をつけてください。
- 0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%

25. 証拠はあるのにそれをやった記憶がない，という体験をする人がいます。あなたの場合，このような体験がどの程度起こるか，数字に○をつけてください。

0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%

26. 自分の持ちものの中に，メモや書きこみがある。自分が書いたのに違うけれども記憶がない，という体験をする人がいます。あなたの場合，このような体験がどの程度起こるか，数字に○をつけてください。

0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%

27. 頭の中で声が聞こえ，自分に何かを命令したり，自分がやっていることについてコメントしたりする，という体験をする人がいます。あなたの場合，このような体験がどの程度起こるか，数字に○をつけてください。

0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%

28. まるで霧を通して世界を見ているように，人や事物が遠く，ぼんやりとしか見えない，という体験をする人がいます。あなたの場合，このような体験がどの程度起こるか，数字に○をつけてください。

0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%